

今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

仕事を楽しむ後ろ姿を見せる キャリア教育の原点を体現した

福岡県立早良^{さわら}高校 副校長 **和田美千代**

キャリア教育の先駆的な取り組みで注目を集めた福岡県立城南高校の「ドリカムプラン」。
その開発を牽引した和田先生が、取り組みを深化させるきっかけの1つとなった
ハードだが心躍った5年間を振り返る。

ライフワークと出会い



2003年の1月から、私は国立教育政策研究所のキャリア

教育の推進に関する調査研究に参加することになりました。福岡県立城南高校で、将来の夢や学問的興味を出発点とした進路学習「ドリカムプラン」を進めてきた私は、「より大きな視点で、今までの取り組みを振り返る機会をいただいたのだ」と考えました。

作成などに取り組みました。小学、中学、高校の教師、大学の研究者などが全国から集まり、さまざまな視点で議論を行いました。それをまとめられたのが総括研究官だった宮下和己^{かずみ}先生でした。

「チーム宮下」の一員でした。会議や資料作りを通して全国のキャリア教育の事例を知ることとは、私にとって次の取り組みを考えるヒントになりました。現場で頑張っている先生方のご苦労を想像し、その思いに共感することも出来ました。調査研究を通して、全国の先生方と同志になっていく、そんな感覚だったので。キャリア教育はライフワークであると自覚したのもこの時期でした。

自分が発信地になる

チーム宮下での5年間の調査研究を通して、私はキャリア教育に対する考えを整理できました。例えば、城南のドリカムプランはその名が示すとおり、生徒に夢があることが前提でした。しかし、高校生全員が最初から夢を持っているわけではありません。それなのに「あなたの夢は何？」と教師が問い続ければ、生徒は夢が見つからない自分を否定的に捉えてしまいかもれません。将来の夢がまだ見えていない状態を前提にした進路指導も、子どもたちにとっては必要でしょう。

また、「やりたいこと」「職業」ではないということも、生徒にしっかりと理解させることが大切です。仕事は、自分のやりたいことに取り組む時間というより、むしろ嫌なことの連続かもしれないかもしれません。しかし、それでも目の前の仕事を一生懸命やっているうちに面白くなり、いつか



和田先生を始め、当時の国立教育政策研究所での調査研究に共に取り組んだ仲間

先輩教師の言葉

生徒にとって
最も身近な社会人・
職業人は教師である

和歌山県立桐蔭^{かつみ}中学・高校 校長
宮下和己

私たちは「学ぶこと、働く

左 みやした・かつみ 和歌山県立箕島高校、向陽高校、和歌山県教育委員会を経て文部科学省へ。国立教育政策研究所生徒指導研究センター総括研究官、児童生徒課生徒指導調査官等に。その後、和歌山県教育委員会などを経て、2012年度より現職。

右 わだ・みちよ 国語科。福岡県立浮羽高校（現・浮羽真館高校）、城南高校、筑紫丘高校、福岡県教育委員会などを経た後、城南高校、修猷館高校、早良高校で教頭を務める。2011年度より現職。

撮影◎桐蔭中学・高校にて



間にか自分の天職になるものですね。そうした職業観の捉え方、そしてキャリア教育にはイベント型と日常型があることなど、学校現場で進路指導に取り組みながらチーム宮下の一員として勉強する中で自分の考えを整理していきました。

東京での仕事について、私はよく教室で生徒に話しました。生徒にとって身近な社会人である私が仕事を楽しくいること、は、生徒にきつと良い影響を与えると考えたからです。もちろん仕事ですから、格好良い話ばかりでなく、愚痴をこぼすこともありましたが、きつと生徒たちは仕事というものの光も影もまるごと受け取ってくれたはずだと思っています。

日本の教師は、教科指導だけでなく、進路指導、部活動、さらにはクラス経営にまでかかわる、まさに全人教育の指導者です。だからこそ、教師自身の生き方を通して、生徒にどう生きるのかを考えさせるチャンスがたくさんあると思います。

そうした意味で私が若い先生方に望むのは、「自分が発信地になる」という意識を持つてもらいたいということです。進路指導でも教科指導でも、「これは生徒のためになる」と自分が信じたのであれば、どんな形にしてほしいと思います。前例がないために不安になったり、反対の声が上がったりして、順調に進まないこともあるでしょうが、それでも、仲間を見つけて理想の実現に向かって進んでほしいのです。その姿、生き様は、きつと生徒の心を動かさずです。

こと、生きること」を教育の中でトータルに考えるのがキャリア教育だと意味付けました。生徒に掃除やホームルームでの係に真剣に取り組みむことの意味を伝えるのもキャリア教育ですし、教師が一生懸命働く姿を見せることもキャリア教育です。和田先生は「生活者としての実感を持ってキャリアを語れるのが女性教師の強み」と話していましたが、和田先生のパワフルな働きぶりは、自分の生き方を教材として生徒に還元しているようでした。それも、和田先生が仕事を楽しんでいたら出来たことでしょう。

今思い返しても、ユニークなメンバーが集まっていたのが、共通していたのは、「これは生徒のためになるのか」を第一に考えることができ、そうと分かたら、苦しくてもやり通す意志を持っていたことです。実際、「やらない理由を挙げるよりもやるための知恵を出す」は、私たちのチームの合言葉でしたから。

今、チーム宮下のメンバーは、それぞれ自分のチームをつくり、活躍しています。その様子を聞く度に私は大きな喜びと、新しい挑戦へのエネルギーをもらっています。